

Title	ホワイトヘッドにおけるプロセス観念の形成
Sub Title	The formation of the idea of process in Whitehead
Author	間瀬, 啓允(Mase, Hiromasa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1996
Jtitle	哲學 No.100 (1996. 3) ,p.5- 19
JaLC DOI	
Abstract	Through his writing of Science and the Modern World (1925), Religion in the Making (1926), and Process and Reality (1929), Whitehead largely developed his own idea of process. In his early stage, process was understood as a transition from one event to the other succeeding event. In this particular sense, a proposition which says "The reality is the process" has been widely accepted as fundamental in Whitehead's idea of process. However, this is not the only meaning of 'process'. There is another side of 'process' and it is expressed by the term, 'concrescence'. This is the side of self-creative activity, and the 'transition' can be regarded as its derivative manifestation of the 'concrescence'. Therefore, in his later stage, Whitehead shows a large development in his idea of 'process'. The being (or reality) of an event is "constituted by its 'becoming'", so that 'process' can be understood in a more dynamic sense of 'being constituted', that is, of 'self-creation'. The aim of this article is to trace the development of this idea of process in Whitehead.
Notes	100集記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000100-0005">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000100-0005</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ホワイトヘッドにおけるプロセス 観念の形成

— 間 瀬 啓 允\* —

## The Formation of the Idea of Process in Whitehead

*Hiromasa Mase*

Through his writing of *Science and the Modern World* (1925), *Religion in the Making* (1926), and *Process and Reality* (1929), Whitehead largely developed his own idea of process.

In his early stage, process was understood as a transition from one event to the other succeeding event. In this particular sense, a proposition which says “The reality is the process” has been widely accepted as fundamental in Whitehead’s idea of process. However, this is not the only meaning of ‘process’. There is another side of ‘process’ and it is expressed by the term, ‘concrescence’.

This is the side of self-creative activity, and the ‘transition’ can be regarded as its derivative manifestation of the ‘concrescence’. Therefore, in his later stage, Whitehead shows a large development in his idea of ‘process’. The being (or reality) of an event is “constituted by its ‘becoming’”, so that ‘process’ can be understood in a more dynamic sense of ‘being constituted’, that is, of ‘self-creation’. The aim of this article is to trace the development of this idea of process in Whitehead.

\* 慶應義塾大学文学部教授（哲学）

## はじめに

1925年『科学と近代世界』, 翌1926年『宗教とその形成』, そして1929年『過程と実在』に至るまでに, ホワイトヘッドのプロセス観念は大きく展開している. 当初, 〈プロセス〉 process は一つの出来事からそれを継承する他の出来事への〈移行〉 transition と理解されていた. そのかぎりにおいて, 「〈実在〉 reality はプロセスである」 (SMW tr., p. 97) という命題がホワイトヘッドの基本的主張として与えられている. しかし, それだけがプロセスの意味ではない. 「プロセス」には〈合生〉 concrescence という言葉で表現される別の側面がある. それは自己創造的な活動の側面であって, 「移行」はむしろこの「合生」の派生的顕現とみなしうるものなのである. それゆえ, 後になるとプロセス観念には大きな展開が示される. というのも, 一つの出来事の存在, つまり〈実在〉 reality はその生成によって構成される (PR tr., p. 38) といわれ, その〈構成〉 to be constituted ということのさらにダイナミックな意味で, つまり〈自己創造的〉 self-creative というさらにダイナミックな意味で捉えられるようになっていったからである. 本稿では, そうしたプロセス観念の発展の軌跡をたどることを目的としている.

## 1

ホワイトヘッドは, 自然哲学の立脚点をもっと完全な形而上学的研究において, さらに「プロセス」を強調することによって, 一層具体的なものにしたいと望んでいた. そして, それは1925年2月のローウェル・レクチャー (『科学と近代世界』) のなかで実現されていった. そこでは近代科学の物質中心主義を批判し, 合わせてその批判の立脚点である自己の立場を明瞭に表明することが意図されていた. そして, そこに表された新しい概念は〈抱握〉 prehension であった. 「抱握」は基本的に, 内的な外延

関係をさす言葉であるから、この〈外延関係〉extensional relations は〈出来事〉event を構成している。そこで、次のように言われる。

抱握は統一化のプロセスである。したがって、自然は抱握から抱握へと必然的に移行する膨張的な発展のプロセスである。達成されたものはそのことによって後に取り残されるが、また同時に、相次いで現われるもろもろの抱握態に自らの諸相を宿すものとして保持されもする。それゆえ、自然は徐々に発展していくもろもろのプロセスの構成物である。実在とはプロセスのことなのだ (SMW tr., p. 97).

これは純粹に〈移行〉transition の哲学であって、ここにはまだ〈合生〉concrecence の入り込む余地はまったくない。出来事および存続する諸事物の本質についての考えから、「時間が原子状をなすもの（すなわちエポックをなすもの）」(SMW tr., p. 174) という考えが引き出されてくるが、この時間的原子性はまだ「移行」を強調するものでしかない。出来事の連続性と時間的実現の原子性とを比較対照させることによって、「移行」の特性が、次のように強調されている。

このようにして時間とは、もともと可分であって接触している諸要素の継起である。持続は、時間的なものと成るときそうなることによって、何らかの存続物に関しての実現をもたらす。時間化とは実現のことである。時間化は実現を離れた別の連続的なプロセスのことではない。それは原子状をなすものの継起である。こうして時間化されたものは可分であるが、時間は原子状をなすもの（すなわちエポックをなすもの）である。この考えは出来事および存続物の本質についての考えから出てくる (SMW tr., p. 174).

時間的原子性は永遠的客体の役割を変化させず、かえってこれを独自のものとする。こうして永遠的客体は超越的なプラトンの形相にも似たものとなる。その形而上的地位は、「現実態に対する可能態という地位」(SMW tr., p. 214)である。あらゆる現実的契機は、どのようにしてこれらの可能態がその契機に対して現実化されるのか、によってその特性を規定される。したがって「現実化とは諸々の可能態のなかから選択すること」(SMW tr., p. 214)である。ここにおいて、ホワイトヘッドは〈限定性の原理〉principle of limitationの導入を必要とする。なぜなら、その原理がなくては永遠的客体の現実化はなされえないからである。

「限定性の原理」は価値を創発し、世界に秩序をもたらす。したがって、それは目的論的論証でいわれる神の役割を果たす。そこでホワイトヘッドはこの原理を〈神〉Godとみなす。神の存在が首肯されるのは、もっぱらこの場合に限られる。しかし、この神は超越的な創造神ではない。純粹にプロセスの世界では、すべての出来事はその都度新たに創造されていくのであるから、もしもそれが創造神のなせる業だとするならば、その創造神には善とともに悪に対しても責任が負わされることになる。それは不都合なことであるから、ホワイトヘッドは神をそのような創造神であるとはみなさない。神を単なる一原理とみなして、永遠的客体のローカスとはみなさないということは、アリストテレス的原理に習わないということでもある。

いまや、アリストテレスのいう第一運動者としての神の代わりに、具体化の原理としての神が必要である。この主張を裏づけるためには、もろもろの現実的契機の進展—すなわち実現のプロセス—についての一般的含意を論じなければならない(SMW tr., p. 234)。

『科学と近代世界』では、永遠的客体は現実態に対する可能態としての

機能を果たすものとして、あらゆる契機に影響をおよぼすという〈汎主体性〉pansubjectivity の考えがとられている。しかし、主体性が可能態の影響を受けるものであるならば、あらゆる契機が主体性を享受することでもなくてはならない。しかし、こうした考えに至るまでには、まだホワイトヘッドには多くの時間が必要とされていた。

## 2

『宗教とその形成』（1926年）では、移行のプロセスは〈契機〉occasion そのものの中で問題にされ、「現実世界は〈新しさ〉novelty への時間的推移という特性をもつ」（RM tr., p. 51）といわれている。そこではまた、自己創造という概念を導入することにより、〈原因〉causa ということにも触れられている。

時間的な現実世界は現実化の契機の諸多性へと分析されうる。これらは時間的世界を構成している主要な現実的単位である。このような契機を「エポック的契機」と呼ぼう。そうすると、現実世界はもろもろのエポック的契機の共同体ということになる（RM tr., p. 52）。

エポック的契機は、一面では、宇宙を集約する創造性の一様態である。この面は自己自身の原因、自己自身の創造的働きとしての契機である（RM tr., p. 59）。

エポック的契機がその自己原因であり、その自己創造的働きだという考えは、〈創造性の多元化〉pluralization of creativity によってもたらされたものである。この点には注意が必要である。先の『科学と近代世界』では、一元的な考えが貫かれていた。というのは、すべての出来事は〈一なる実体的活動力〉one substantial activity の様態だと考えられていた

からである (SMW tr., pp. 238-9). ところが時間的原子論の導入によってからは、〈現実的契機〉 actual occasion なる語が示すように、事態が変化しはじめる。しかし、すぐさま〈多元論〉 pluralism に転じたわけではない。そこにはあらゆる契機の基底にある〈実体的活動力〉 substantial activity なる概念が残っていたからである。解決の糸口は創造性を多元化して、それぞれの契機に独立の立場を取らせることであった。そこで、それぞれの契機はその活動力の顕現または様態ではあっても、「創造性と被造物という二つの現実的実質があるのではない。自己創造的な被造物という一つの実質が存在するだけだ」 (RM tr., p. 59) という主張に移っていったのである。ただし、こうした主張の展開によってプロセス観念が〈内的移行〉 internal transition という考えにまでは至っても、まだ〈合生〉 concrescence にまでは立ち至っていない。

〈一元論〉 monism から〈多元論〉 pluralism への展開は、『宗教とその形成』の初めの二講と終わりの二講とのあいだで起きている。もしもホワイトヘッドの哲学が一元論にとどまっていたならば、神はどこまでも限定性の原理として、非人格的なものとどまっていたことだろう。確かに初めの二講までは、神は非人格のままである。たとえば第二講では、次のようにいわれている。

この宗教的体験が特定の人物ないし個人についてのいかなる直接的な直観をも含んでいないという否定的な教説に対しては、広く同意が得られている (RM tr., p. 34).

ところが、次の第三講に入ると、かれの哲学は多元論的になる。神は他のなかの一現実態であり、一現実態である以上、心的と物的とから成る両極のものである。そのかぎりにおいて、神は主体性と意識を享受するものでもある。そこで終わりの二講では、神は人格的なことばで表現されるよ

うになった。

神の存在の深みは賞賛ないしは権力の卑俗性を越えたところにある。神は苦しみに対して、そこから生じうる諸価値への敏速な洞察を与える。神は理念的な同労者であり、失われたものを神自身の本性のうちに生きている事実へと変質させる。神はすべての被造物にそれ自身の偉大さを明示する鏡である (RM tr., p. 91)。—(中略)—世界は、世界自体への神の受肉によって生かされている (RM tr., p. 92)。

### 3

1926年9月マサチューセッツ州ケンブリッジで開かれた第6回国際哲学会において、ホワイトヘッドは『時間』と題する小論を発表している。そこでは〈替越〉supersession という言葉が使われているが、その意味するところはもっぱら〈移行〉transition である。しかし、そこには古いものが新しいものによって取って替えられる（替越される）その仕方が生き生きと描出されている。

もしも時間が真剣にとりあげられるならば、いかなる具体的実質も変化しえない。それは替越されうるのみである (Time tr., p. 99)。

替越は三方向的なプロセスである。各契機は他の契機を替越し、各契機は他の諸契機によって替越され、そして各契機は内的には、部分的に可能的な、また部分的に現実的な、替越のプロセスである。ある契機における現実的で内的な替越の一例は、心的契機が物的契機を替越することである (Time tr., p. 100)。

替越は生成の連続的なプロセスではない。—(中略)—具体性を得たその



結果、契機 A を替越する契機 B は、一定の時間量子を具体化する。そしてこの時間の一定量子のことを私は合生の「エポック的性格」と呼ぶ (Time tr., pp. 108-9).

時間は諸契機の物的極にもっぱら関わりをもち、心的極には派生的にのみ関わりをもつ。しかし、ある契機の物的極と心的極とのあいだの連結は、替越というカテゴリーが時間を超越するという真理を例示している。なぜなら、この連結は外時間的でもあり、またしかも同時に替越の一事例でもあるからだ (Time tr., p. 100).

この引用の一つ前で、〈合生〉concrecenceという言葉がみえていますが、そこでの「合生」は「具体性」の意味であって、まだ本来の意味での「合生」ではない。なぜならその先では、「一契機はさまざまな要素の一具体性—すなわち growing together—である」(Time tr., p. 101) といわれ、本来の意味での「合生」—growing together—は、ここでは「具体性」の意味で使われているからである。こうしたことばの使い方から判断すれば、ここではまだプロセス観念の展開は十分におこなわれているとは言いがたい。『時間』では、プロセスはもっぱら「替越」—「移行」—に集中している。

#### 4

先に見たように、心的契機は物的契機を替越しているので、いかなる現実的契機も物的契機には分割されえない。そこで替越としてのプロセスにはさらなる思考が必要とされるのである。つまり、「移行」に加えて、さらに別種のプロセスが求められることになるのである。確かに『時間』を境にして、ホワイトヘッドのプロセス観念には大きな展開がみられる。それは契機と契機のあいだの関係をみる立場から、契機内の関係をみる立場

への展開であり、それに伴って、契機内でのプロセスの意味が徐々に明確化されていったからである。そこで出てきたものが〈合生〉concrecenceであった。

「移行」は単に二者間の移動を意味する用語であったのに対して、「合生」は本性上、さらに大きな複合的統一性の諸相へと分析可能な、漸進的プロセスである。そこでホワイトヘッドは、「移行」—契機と契機のあいだを移動すること—と、「合生」—契機内のさまざまな要素を統一すること—とを結びつけるものとして〈生成〉becoming という働きを考えはじめたのである。こうした思考上の展開は、ギフォード・レクチャー（『過程と実在』）において顕著にあらわされている。

「合生」は契機の内的活動のことであり、そこでは「プロセス」の別名として導入されている。たとえば、現実的実質を構成する四つの段階として「与件」「決断」「プロセス」「満足」ということがいわれているが (PR tr., p. 259), そこでの与件と決断は「移行」に、プロセスと満足は「合生」に、それぞれ直接関係する。

この与件が定着した世界によって「決断」されるのだ。それは後続する新たな実質によって「抱握」される。与件は経験の客体的内容である。与件を供与する決断は、自制された欲求の譲渡である。—そして新しい合生はこの与件から出発する。—(中略)—与件は最終的満足に関して未決定である (PR tr., pp. 259–60)。

こうして現実的実質の合生における最初の段階は、先立つ宇宙が当の実質の構造に介入して、まさに生まれようとする個性性の基盤となる仕方である。こうした真理の逆の見方は、現実世界におけるそれ自身の地位の、他のもろもろの現実的実質との関連が、その合生のプロセスの最初の与件である、ということになる。与件のこうした解釈を強調すること

が望ましい場合には、「客体的内容」という言い回しが、「与件」という用語と同義的に使用されるだろう (PR tr., p. 263).

〈与件〉 datum と 〈客体的内容〉 objective content とは、この文脈では〈客体的与件〉 objective datum と同義のものとみなすことができる。そしてホワイトヘッドの探究はこの客体的与件がいかにして客体的満足へと移行するかという点に向けられたのだった。これはカント哲学の逆転である。『純粹理性批判』は、主観的与件が客観的世界の現象へと移行する過程を記述しているのに対して、『過程と実在』は、「客体的与件がいかにして主体的満足へと移行し、そして客体的与件における秩序がいかにして主体的満足における強度を供与するかということ」(PR tr., p. 152) に記述が向けられているからである。

与件は過去の現実的世界から何を感じられるかに関しては決定的であるが、それがいかに感じられるかに関しては未決定である。それゆえ、次のように言われる。

与件は最終的満足に関しては未決定である。「プロセス」は「感じ」の諸要素を付加することであり、それによってこれらの未決定は個体的な現実的実質の現実的な統一性を達成する決定的連結へと吸収される。--こうしてプロセスとは、創造的観念が決定的な個性の限定と達成に向かっていく段階である。--最終目標の漸進的限定がその成就のための効果的条件である。現実的実質の決定的統一性が結ばれるのは、与件のさまざまな決定ならびに未決定と漸進的に関係することによって、漸進的に限定されるある理想に向かう目的因である。それ自身感じられるこの理想は、「自己」が与件から成立するであろうものを限定する。そしてこの理想はまた、こうして成立する自己のうちでの一要素である (PR tr., p. 260).

これは『宗教とその形成』において初めて必要とされた〈自己創造性〉self-creativity についての理論的展開である。というのは、与件は主体性を欠くが、これを合生のプロセスのなかで獲得する、といわれているからである。自己は与件から成立する一つの理想である。そしてこの理想は、それぞれの現実的実質に特有のもの、私的理想、漸進的にプロセスそのもののうちで形成されていくもの、である。ホワイトヘッド自身においては、それは〈それ自身の理想〉ideal of itself である。したがって、次のような記述がおこなわれている。

それぞれの場合に、特殊な各現実的実質に特有で、「所与性」のその相において支配的な構成要素に由来するある理想がある (PR tr., pp. 143-4).

自己創造において、現実的実質は個体的満足としての、また超越的創造者としての、それ自身の理想によって嚮導される。この理想の享受が「主体的指向」であり、それゆえに、現実的実質は決定されたプロセスなのだ (PR tr., p. 146).

〈私的理想〉private ideal は合生の中間段階にあるものとして、次のようにも記述されている。

第二の段階は、プロセスそれ自体において漸進的に形をとってくる私的理想によって差配されている。それによって外来的なものとして派生的に感じられる多くの感じは、私的なものとして感じられる感性的弁別の統一性へと転換される (PR tr., pp. 369-70).

5

「合生」は、あるものが具体的なものに入っていくプロセスのことであるが、語源的には〈共に成長すること〉growing togetherである。またそれは、端的に「多から一への個体的統一」(PR tr., p. 367)ともいわれている。このプロセスの観念が前面に押し出されることによって、統一のための二つのプロセスが明確化されることになった。それが〈合生〉con-crescenceと〈移行〉transitionである。この二つが〈二種の流動性〉two kinds of fluencyとも、〈二種のプロセス〉two species of processともいわれるものである。

一方の種類は、特定の存在者の構造に内属する流動性である。この種類を私は「合生」と呼んできた。もう一方の種類は、それによって特定の存在者が完結するやいなや、プロセスの消滅がその存在者を、プロセスの反復によって誘発される他の特定の存在者の構造のうちで原初的要素として構成する流動性である。この種類を私は「移行」と呼んできた。合生はその主体的指向である目的因に向かって動く。移行は不死的過去である作用因の媒体である (PR tr., p. 366).

要約すると、巨視的プロセスと微視的プロセスとの二種のプロセスがある。巨視的プロセスは成就した現実態から、成就しつつある現実態への移行である。他方、微視的プロセスはたんにリアルにすぎない諸条件を決定された現実態へと転換するのである。前のプロセスは「現実的なもの」から「たんにリアルにすぎないもの」への移行を惹起し、後のプロセスはリアルなものから現実的なものへの成長を惹起する。前のプロセスは作用因的であり、後のプロセスは目的論的である (PR tr., p. 373).

「合生」が初めの「多」に統一を求めるプロセスであるのに対して、「移行」は多なる「客体化」を統一するプロセスであった。そこで、こうした二重のプロセスを単一のプロセス—多なる過去の現実態から満足の最終的統一へと移動する単一のプロセス—へと仕上げる道が求められた。この道を求めてホワイトヘッドは〈感じ〉feelingと〈抱握〉prehensionの同定にふみきった。つまり、「抱握」に対して積極的と消極的の区別を導入し、積極的抱握を厳密に「感じ」と同定したのである。そして、もしも「感じ」が現実的契機を現実化させるプロセスのことであるならば、このかぎりにおいて最初の与件は過去の現実世界を形成し、「移行」がそれなりに新しい意味を付与されうるものとなるだろう、と考えたわけである。そこで、かれは次のようにいう。

感じ—つまり積極的抱握—は本質的に、合生を惹起する移行である。感じの複合的構造は、その移行が何から成っており、何を惹起するかを表現する五つの要因に分析されうる。これらの要因は(i)感じる「主体」、(ii)感じられうる「最初の与件」、(iii)消極的抱握による「除去」、(iv)感じられる「客体的与件」、(v)その主体がその客体的与件をいかに感じるかの「主体的形式」、である (PR tr., pp. 402-3).

「移行」と「合生」は、ここでは同等のものと考えられ、それぞれの「感じ」に適用されている。両者はともにプロセスであるが、同一のプロセスの異なる側面のことである。そこで、次のような平行的な言明に留意する必要がある。

そこには最初の与件から、除去によって惹起された客体的与件への移行がある。--最初の与件から、除去によって可能となり主体的形式によって惹起された客体的与件への合生がある (PR tr., p. 403).

統一としての移行が合生のことであるが、合生は与件から与件への移行を意味する。したがって合生において、移行は主体的形式によって惹起されたというわけである。この理解のもとでは、プロセスは世界の多くの現実的実質から始まる単一的な統一行為のことだといえるだろう。

## おわりに

「プロセス」には二種のプロセスがあった。客体的与件をもたらす「移行」と、もろもろの感じを自己のうちへと統一する「合生」である。しかし、その理解の展開のうえで、「移行」は、少なくとも分離した活動としては姿を消した。そして「合生」は、そこに始まる最初の客体的与件に依存しないものとして理解されるようになった。したがって、「合生」は物的感じを通して過去の現実的世界へと至る。そして、それは一つの連続した統一行為となる。それゆえ、過去の世界がそれであるところの諸多性とともに、「合生」は始まる。この「合生」が純正の〈生成〉becomingである。「〈實在〉realityはその生成によって構成される」(PR tr., p. 38). それが〈プロセスの原理〉principle of process だからである。

しかしながら、「移行」もまた有用な概念として保持されている。とくに巨視的行動を指す方法としてである。しかし、「移行」のあらゆる行動のための基盤は「合生」にある。したがって、「移行」と名づけるプロセスによって、流動の哲学を理解しようとすることは基本的に誤りである。もろもろの契機の存続と変化は二種の移行であるが、合生はそのどちらでもない。むしろそれは両者の根拠である。したがって、プロセスの理解には、もっぱら「合生」に焦点を合わせることが肝要である。「合生」は、現実的契機がその過去から、その最初の主体的指向から、そしてそれ自身の決断から、いかにして生成するかを説明するものなのであるから、それはプロセス理解のための基本であると考えられるのである。

文 献

(SMW) *Science and the Modern World* (『科学と近代世界』上田・村上共訳, ホワイトヘッド著作集第 6 巻, 松籟社)

(RM) *Religion in the Making* (『宗教とその形成』斎藤訳, 同著作集第 7 巻)

(Time) *Time* (『時間』斎藤訳, 同著作集第 7 巻)

(PR) *Process and Reality* (『過程と実在』山本訳, 同著作集第 10 巻, 11 巻)

Donald W. Sherburne, *A Key to Whitehead's Process and Reality* (『過程と実在』への鍵』松延・平田共訳, 晃洋書房)

Lewis Ford, 'The Concept of Process: From Transition to Concrescence', in *Whitehead and the Idea of Process: Proceedings of the First International Whitehead-Symposium 1981*

Ivor Leclerc, 'Process and Order in Nature', in *Whitehead and the Idea of Process: Proceedings of the First International Whitehead-Symposium 1981*